

[論文]

養成校学生の就職先決定理由の分析 -実習園を就職先とする事例に着目して-

鳥海 弘子
浅井 拓久也
小 口 偉

Analysis of Reasons for Determining Employment Places for Training School
Students-Focusing on Cases of Employment at Training Schools

Hiroko Toriumi
Takuya Asai
Suguru Oguti

キーワード：実習園・就職先・人間関係

Key Words : Training school, Employment Place, Relationships,

要約：本研究の目的は、保育者養成校における就職先決定理由の分析と実習園を就職先とする事例に着目して、自由記述の分析には **KH Coder** を用いた共起ネットワーク図の抽出から、実際の職業選択をする過程において実習での経験が、学生の職業選択にどのような関係をもたらしているかについて明らかにすることである。分析結果として「実習園に就職した学生」は実習中の保育者の接し方や保育所の雰囲気良さなどを挙げている。「実習園に就職しない学生」は実習中の日誌の書き方の説明が保育者により違って困ったことや保育者による厳しい指導などを挙げていることが明らかとなった。

1 緒言

保育を取り巻く社会情勢の変化に伴い、保育所保育指針の改定（2017 年）や保育士養成課程の見直し（2019 年）等により保育の質の向上に向け、実践力のある保育士養成が求められている。保育者としての実践力を身につけるためには、保育・教育実習が不可欠である。保育実習の目的は、「その習得した教科の全体の知識、技能を基礎とし、これからを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させること」と示されている¹⁾（厚生労働省 2019）。

学生にとっての実習は実体験の少ない学生にとって不安が多くあることが報告されている（内本 2002：村田 2004：吉田 2009：岩崎 2009：貴田ら 2012：入江ら 2014）。また、子ども及び保育者との関係の構築、実習日誌の記述などから大きなストレスを受けており、心身の健康を維持するのが困難になることも報告されている（野崎 2013：小河ら 2015）。

しかし、実習は学生が就職を考えるきっかけにもなる。学生は、保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱ又は保育実習Ⅲの学びの中で学びを深めながら自分自身が保育者として将来の選択肢も考えているのが現状である。実際、実習園に就職する学生も多く、実習と就職は不可分の関係にある。そこで本研究の目的は、そのような中で実際の職業選択をする過程において実習での経験が、学生の職業選択にどのような関係をもたらしているかについて明らかにすることとする。

2 調査概要と分析方法

2-1 調査対象・期間・方法

本研究の調査対象者は、保育者養成校（短期大学）一部 2 年生 102 名・二部 3 年生 54 名 合計 156 名とした。調査は、「子どもの保健Ⅱ」最終回の授業と二部 3 年生「普通救命講習会」で実施した（2020 年 1 月）。この時期に実施したのは、本研究では学生の就職先を分析に用いるため、就職が決まっていると予想される時期に調査を実施する必要があったからである。

調査方法は Web にて実施した。質問項目は、本研究の目的と学生の回答負担を鑑みて、「1、就職が決まっている場合、就職先はどこですか。1 つだけマークしてください。

（保育所、幼稚園、認定こども園、保育所以外の福祉施設、その他）」、「2、就職が決まっている場合、なぜその就職先に決めたのか 50 字程度で書いてください。」、「3、就職先が保育所等の場合、就職先と実習園は関係がありますか。（前期か後期に実習をした園、自分が卒業した園（母園）、教員や友人が紹介等してくれた園、その他）」、「4、実習園は自分が希望した園でしたか。（自分が希望した園、希望していない園）」、「5、実習園（保育所）について、よかったところ（こと）を 100 字程度で書いてください。」、「6、実習園（保育所）について、よくなかったところ（こと）を 100 字程度で書いて

ください。」とした。質問紙への回答は学生自身のスマートフォンにて行った。

実際にどのような時期にどの実習に行くのかを表 1 に示した。

表1	実習計画表		
幼稚園実習（前期）	1年次	11月	10日間実施
保育実習Ⅰ	1年次	2月	12日間実施
幼稚園実習（後期）	2年次	6月	10日間実施
施設実習	2年次	7～9月	11日間実施
保育実習Ⅱ	2年次	10月	12日間実施

2-2 分析方法

分析に使用するデータは次の通りである。授業の出席者である 156 名から 125 名の回答を得た（回答率 80%）。ここから、本研究の目的に即して、保育所または幼稚園に就職したものを抽出し、かつ①保育または教育実習を実施した園に就職したものと、②それ以外の保育所または幼稚園へ就職したものと分けた。また、同一回答者による重複した回答、回答者名以外は空白の回答を除外した。その結果、①は 16 名、②は 56 名であった。「5、実習園について、よかったところ（こと）を 100 字程度で書いてください。」と「6、実習園について、よくなかったところ（こと）を 100 字程度で書いてください。」の自由記述の分析には、KH Coder を用いた共起ネットワーク図の抽出を行った。自由記述を単に羅列するのではなく、共起ネットワーク図で示すことで特徴を可視化、明示化しやすくなるからである。共起ネットワーク図の抽出では、集計単位は文、最小出現数は 2、最小文書数は 1、Jaccard 係数は 0.3 以上とした。

2-3 倫理的配慮

本研究は秋草学園短期大学の研究倫理委員会にて承認を得た。（承認番号 2019-15）

3 結果

3-1 実習園（保育所）について、よかったところ（こと）（実習園に就職した学生の回答）

図 1 は質問項目 5 に対する実習園に就職した学生の共起ネットワークを示したものである。

図 1 からは「細かい」、「主任」、「教える」、「責任」、「反省」「一緒」という言葉がみられる。実際には「わからないことを細かく教えてくださった。」、「責任実習をした後、担任と一緒に細かく反省会をしていただいた。」とあった。また、子どもとの関わりとして「実習」、「子ども」、「関わる」、「ひとりひとり」、「たくさん」という言葉がみられた。実際には「ひとりひとりの子どもにゆっくり関わる時間があった。」そして「先生」、

「優しい」という言葉から「先生方が優しく接しやすかった。」「先生たちも優しくしてくれ、保育内容が自分に合っていると感じた」との回答であった。

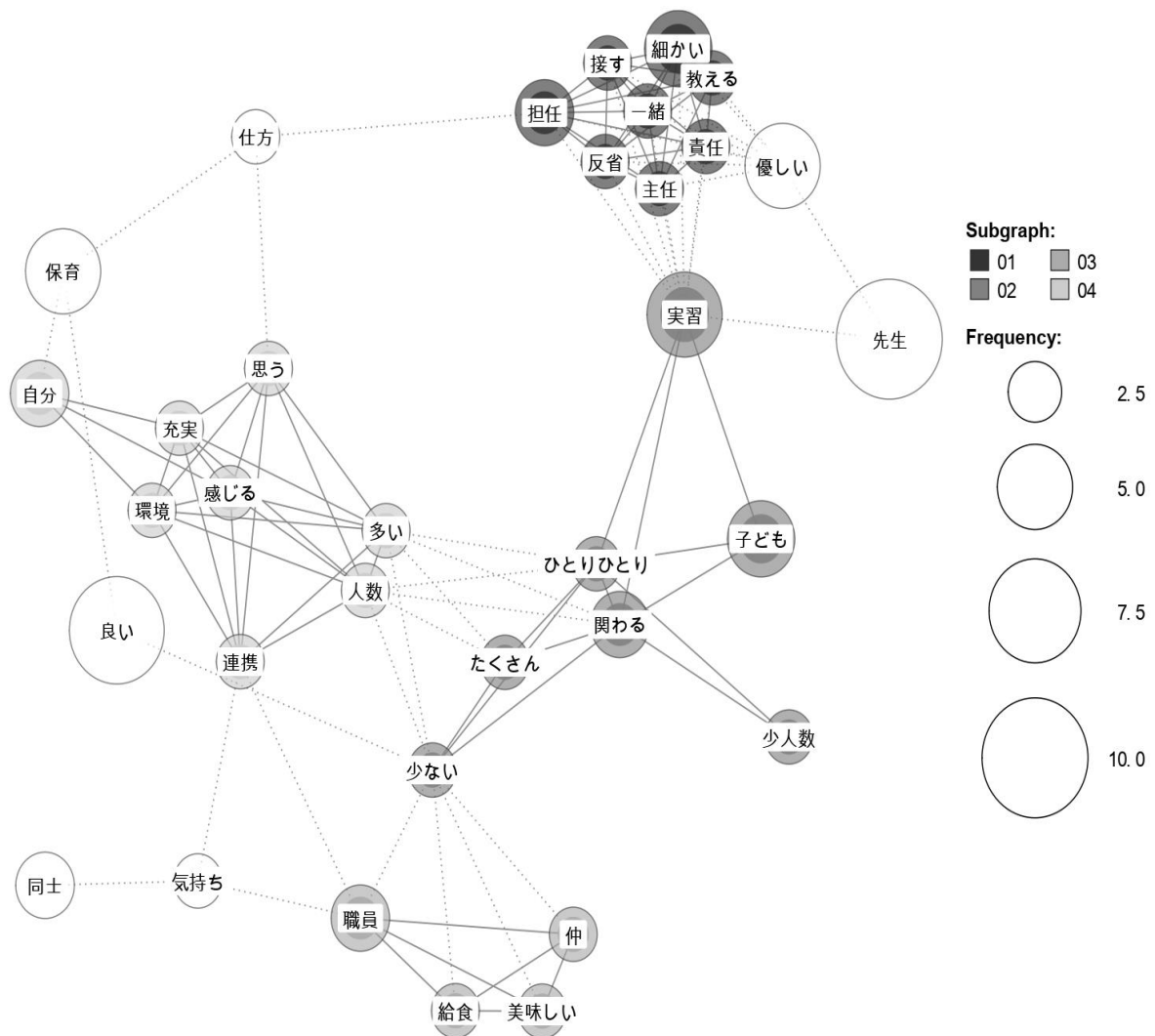


図 1 実習園について、よかったところ（こと）実習園に就職した学生の共起ネットワーク

3-1-2 実習園についてよかったところ（実習園以外のところに就職した学生の回答）（質問項目 5）

図 2 は質問項目 5 に対する実習園以外に就職した学生の共起ネットワークを示したものである。

図 2 からは、「人」、「関係」、「若い」、「良い」、「感じ」という言葉がみられる。実際には「人間関係が悪いわけではないが、若い人に厳しいときもあった。」「若い先生も多く、雰囲気がとても明るく学びやすかった。」また、子どもとの関わりでは「子ども」、「関わる」、「距離」、「難しい」という言葉がみられた。実際には「子どもとの距離が近すぎると感じる事が多々ありました。」「異年齢保育の難しさや良さを学ぶことができた。」との回答であった。

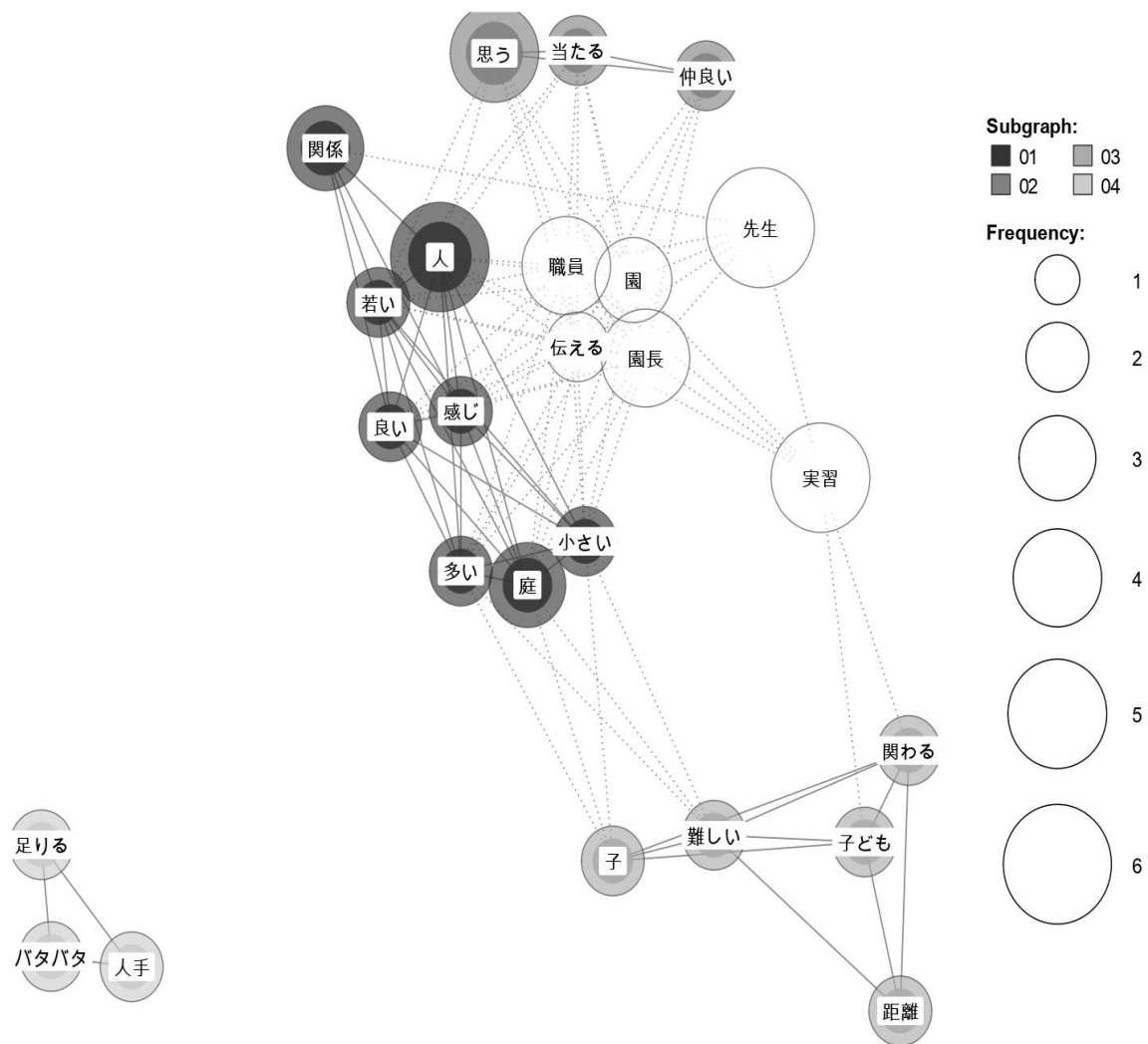


図 2 実習園について、よかったところ（こと）実習園以外に就職した学生の共起ネットワーク

3-3 実習園（保育所）について、よくなかったところ（こと）（実習園に就職した学生の回答）

図 3 は質問項目 6 に対する実習園に就職した学生の共起ネットワークを示したものである。

図 3 からは、「教える」、「丁寧」、「アドバイス」、「わかる」、「指導」、「反省」という言葉がみられる。実際には「毎日反省会での指導が多すぎて、負担となった。」、「園長先生の伝え方は正論ではあったが、口調が強く受け止めるのが辛かった。」また「実習」、「責任」からは「責任実習の準備や指導案の修正が思うように出来なかった。」、「人手が足りずバタバタしている中での実習がきつかった。」、進路についての言葉として「公立」、「進路」、「考える」、「見る」、「決める」、「現実」がみられ、実際には「公立園での実習で現実を知ることが出来た。」などの回答であった。

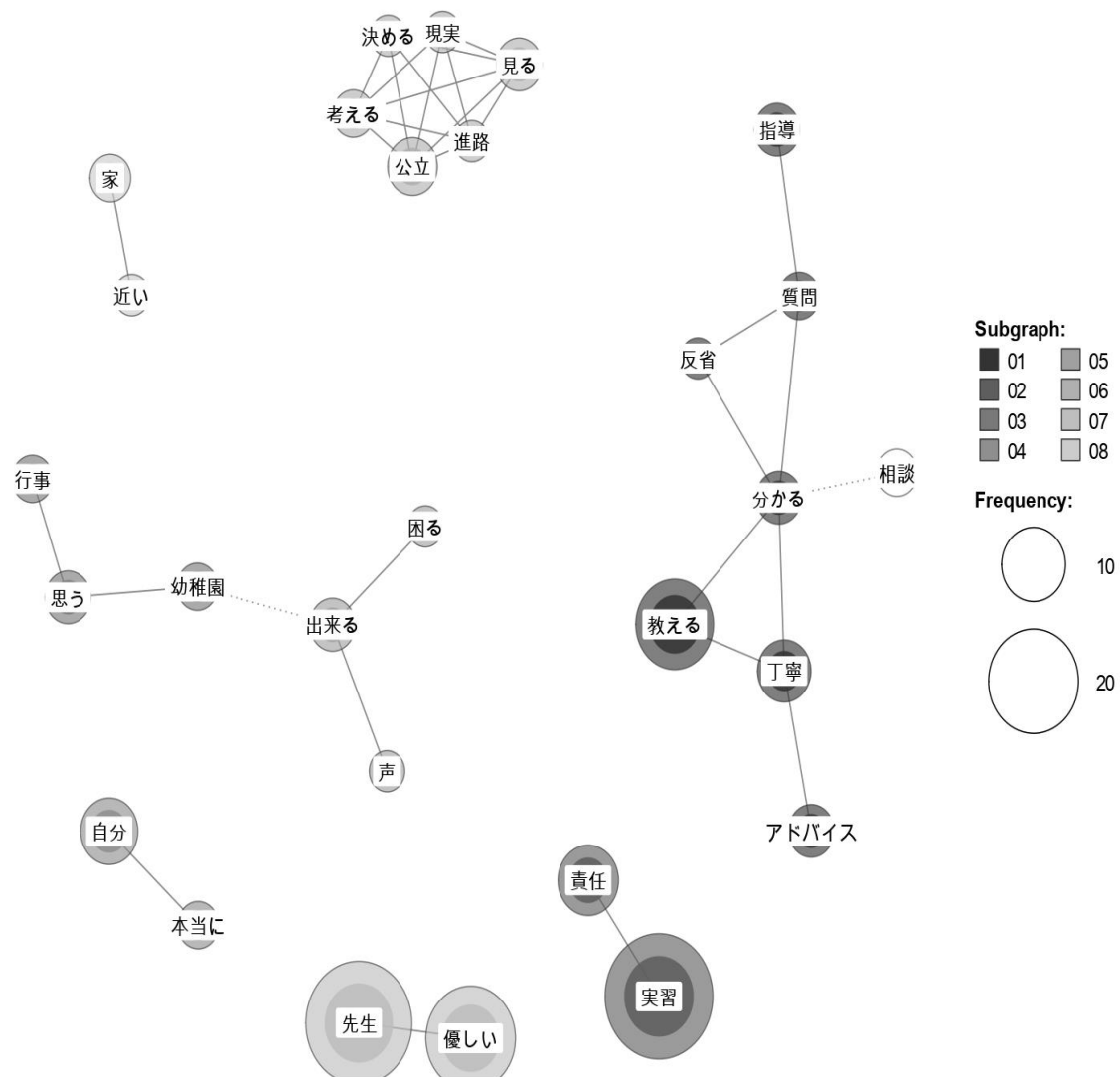


図 3 実習園について、よくなかったところ（こと）実習園に就職した学生の共起ネットワーク

3-4 実習園についてよくなかったところ（実習園以外に就職した学生の回答）（質問項目 6）

図 4 は質問項目 6 に対する実習園以外に就職した学生の共起ネットワークを示したものである。

図 4 からは、「先生」、「言う」の言葉が見られた。実際には「先生が厳しかった。」、「休憩時間の先生の愚痴や不満を聞くのが嫌だった。」、「先生同士や保護者への愚痴などを実習生の前で言う」また、「実習」、「クラス」、「日誌」、「責任」、「書き方」「全然」という言葉がみられる。実際には「先生により日誌の書き方が違うため困った。」、「先生が厳しく日誌の直しが細かすぎる。」、「クラスにより対応が違うため困った。」との回答であった。

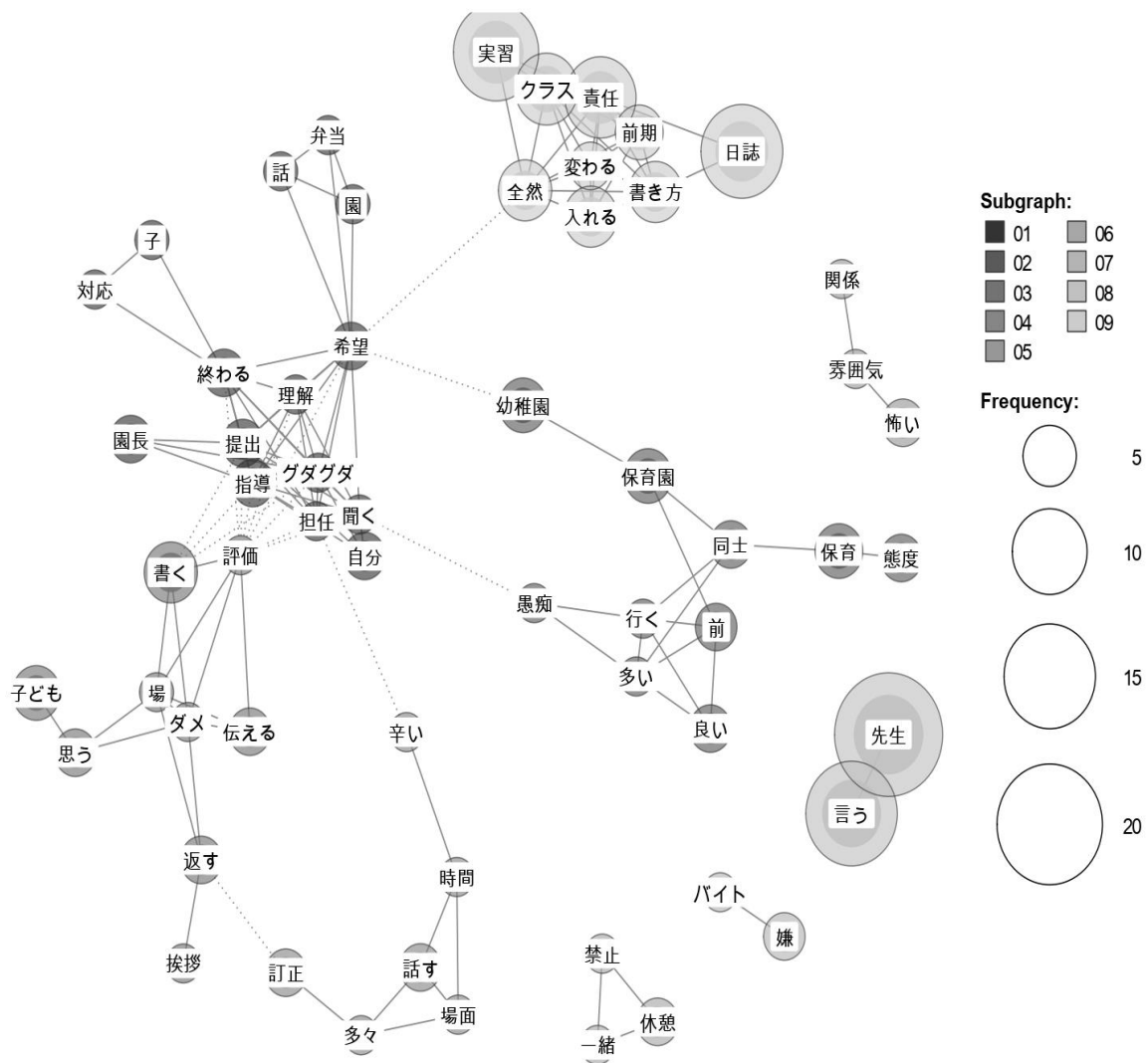


図 4 実習園について、よくなかったところ（こと）実習園以外に就職した学生の共起ネットワーク

4 考察

実習園に就職した学生は 16 名（保育所 11 名・幼稚園 5 名）と少ない結果であった。まず、実習園に就職する要因の一つとして人間関係であろう。「実習園のよかったこと」から、「保育者の指導がとても優しく丁寧に教えてくれた」とあり、優しく接してもらえたことが大きかったと考えられる。先行研究が示しているように、ほとんどの学生は実習への不安を抱えている。そのような状況からのスタートとなり、実習園での職員間の人間関係を感じながら、優しさに触れることでほっとし、もし働くとしたら人間関係のいい職場と考えているようである。

一方で、実習園に就職をしなかった学生の「実習園のよくなかったこと」の記述から（3-4）、「日誌の書き方が先生によって違った」、「先生同士や保護者への愚痴などを実習生の前と言う」など、実習中の厳しい指導によるイメージの低下も少なからず要因として考えられるが、実習園の雰囲気や人間関係を感じており、この実習園の人間関係の中では、自分自身が働くことはできないと考えて就職先として選択しなかった可能性

があろう。田爪らは(2009)「最初の保育実習において保育者が実習生をどう受入れてくれるかがその後の進路の鍵となりそうである」と述べている²⁾。また、白石(2017)は「実習生から見てあまり好ましくない保育者の姿は、就職に悪い影響を与えている」と述べている³⁾。その結果、実習園以外での就職を検討する学生が増えている傾向がみられる。保育者による園の不満や愚痴は内部情報として学生はとらえ、そこから好ましくない人間関係を感じ取り、職業選択として実習園ではない所への就職を選択したものと推察される。

また、きめ細かな指導も就職への重要な要因であると推察される。自身の日誌や指導案に対するきめ細かな指導や反省会を通じた実習の振り返り支援によって、学生は保育者としてすべきことを理解し、同時にそうした支援があった実習園を就職先として選択しているのではないだろうか。矢野ら(2002)は「保育者の振る舞いを細部まで観察する中で子育てや保育者の人間性には還元しきれない保育の専門的要素に対する認識が深まる」ことを示している⁴⁾。大野らは(2014)「実習を経験する中で保育という仕事の重要性を理解している学生は、保育という職業をよく深く考えるようになっていく」と指摘している⁵⁾。

もちろん、こうした支援は必ずしも好意的な解釈になるとは限らない。日誌や指導案の指導がきめ細かな指導となるか、対応できない難しいものや細かすぎて困る指導になるのかは両方の可能性があるだろう。よってきめ細かな指導を学生が好意的解釈するよう、指導する保育者も実習担当者も導いていくことが重要な点となろう。森(2003)は、「実習の失敗を能力に帰属させて考えてしまうと、あきらめや無力感に陥る」と指摘している⁶⁾。小藺江(2009)は、「学生が就職を目前にして保育の道を選択するためには学生の自己効力感も重要な要素である」と述べている⁷⁾。きめ細かな指導を受けることで、自分が保育者として成長していると実感できることが重要であろう。それが、実習園を就職先として選択することにつながっていく可能性を高める。

5 結論

実習での経験が、学生の職業選択にどのような関係をもたらししているかについて、「実習園に就職した学生」は実習中の保育者の接し方や保育所の雰囲気の良いなどを挙げ、「実習園に就職しない学生」は実習中の日誌の書き方の説明が保育者により違って困ったことや保育者による厳しい指導などを挙げていることが明らかとなった。実習園を就職先とする選択の要因としては、特に実習中に感じる「人間関係」と「きめ細かな指導」としていることが推察された。アンケート調査からも明らかなように実習での体験は、将来の進路に影響をあたえている。だからこそ実習の事前事後指導も丁寧に行いたい。とはいえ、全ての学生の需要に応じて対応ができているかと言えば、難しい現状もある。できる限り個別指導により、学生の実習での学びと実習園からの評価や判

断のすり合わせをしたり、職業選択の視点からも園の評価を細やかに検討したりするなどの対応を行うことが望ましいのではないかと。学生のより良い就職先選択に対しての体制づくりが大きな課題である。

また、本稿は、学生の意見からの分析としたが、今後は実習受入園側の就職への期待についても具体的に明らかにしていきたい。

そして、養成校にとっては就職へのしっかりしたキャリアデザインを築きながら保育者として使命を果たす自覚を入学時から学べるシステムの構築が不可欠であろう。

さらには養成校と保育施設が密に連携し、就職後の保育者に求められる資質能力向上のため、継続的なサポートや指導方法は更なる検討が必要であろう。

引用文献

- 1) 厚生労働省 子発 0 904 第 6 号 (2019) 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000546183.pdf>
(閲覧日 : 2021.7.7)
- 2) 田爪宏二・小泉裕子 (2009) 実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討, 鎌倉女子大学紀要, 16, 13-23.
- 3) 白石雅紀 (2017) 実習が保育者としての就職に影響を与える要因に関する考察 -A 短大の事例より-, 東京未来大学研究紀要, Vol. 11, 12, 181-189.
- 4) 矢野博史・田浦智子 (2002) 保育職希望者の保育者像に関する調査より高い専門性を備えた保育者養成のために一, 広島文化短期大学紀要, (33-35), 1-11.
- 5) 大野和男・小泉裕子 (2014) 保育者のアイデンティティの形成過程, 鎌倉女子大学学術研究報, 14, 35-40.
- 6) 森知子 (2003) 保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連, 臨床教育心理学研究, 29, 1, 31-39.
- 7) 小藺江幸子 (2009) 保育実習自己効力感尺度作成の試み, 淑徳短期大学紀要, 48, 124-135.

参考文献

- 内本充統 (2002) 実習生としての不安を理解 するために (その 1), 保育研究, 30, 94-97.
- 村田務・岡本美智子・小林義郎・海野阿育 (2004) 保育実習への不安状況に関する調査, 白梅短期大学教育・福祉センター研究センター研究年報, 9, 13-31.
- 吉田康成、(2009) 実習不安の内容と変化 (Ⅱ), 夙川学院短期大学教育実践研究紀要, 31-38.
- 岩崎桂子 (2009) 保育実習に関する不安調査からの一考察, 研究紀要 2 (小池学園),

1-10.

貴田美鈴・谷口篤 (2012) 保育実習 (施設) の事前指導と実習後の学生の意識-

実習の期待感と不安感及び学習成果の自己評価-, 岡崎女子短期大学研究紀要, 45, 21-28.

入江和夫・福地昭輝・入江三津子 (2014) 学生の保育実習不安と自立感, 山口大学教育学部附属 教育実践総合センター研究紀要, 38, 21-28.

野崎秀 (2013) 保育者養成における実習の達成目標と保育者効力感が実習ストレスに及ぼす影響, 宮崎学園短期大学紀要, 6, 69-75.

小河妙子・長屋佐和子 (2015) 保育士養成課程に在籍する学生の職業認知が保育者効力感に及ぼす影響, 名古屋女子大学紀要, 61 (人・社), 109-115.

全国保育士養成協議会 (2018) 保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2

「協働」する保育士養成, 中央法規.

厚生労働省 (2021) 保育士の現状と主な取組,

<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000661531.pdf> (閲覧日: 2021.9.10)

厚生労働省 (2021) 保育を取り巻く状況について,

<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000784219.pdf> (閲覧日: 2021.7.7)

厚生労働省 (2021) 「保育所等関連状況取りまとめ (令和3年4月1日)」,

<https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000821949.pdf> (閲覧日: 2021.9.15)

大豆生田啓友・渋谷行成・鈴木美枝子・田澤里喜 (2020) 学生・養成校・実習園がともに学ぶ これからの時代の保育者養成・実習ガイド, 中央法規.

小藺江幸子 (2014) 保育実習が学生の自己効力感に与える影響, 淑徳短期大学紀要, 53, 97-112.

付記

本研究は第17回日本子ども学会で発表した内容を加筆修正したものである